博　多　194

― 博多遺跡群第241次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1482 集

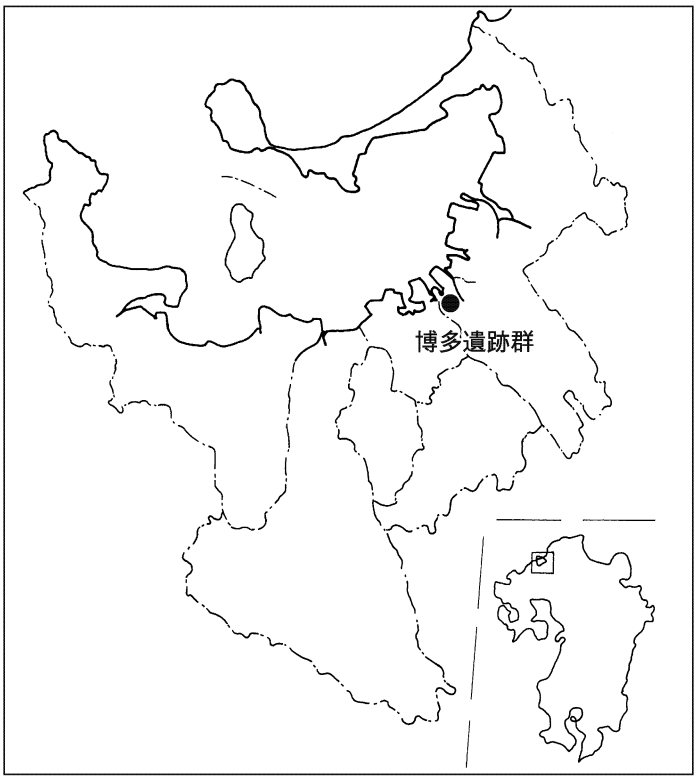
２０２３

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　194

― 博多遺跡群第241次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1482 集



２０２３

福 岡 市 教 育 委 員 会

巻頭図版

博多遺跡群第 241 次調査全景（北東から）

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、ホテル建設に伴い、令和2年6月から9月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第241次調査の成果を報告するものです。遺跡のある博多は中世において対外交渉の一大拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告はその交易活動に関わる場とみられる区域の調査で、調査成果は、対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、小田急電鉄株式会社をはじめ、関係者の方々からご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

令和５年３月23日

福岡市教育委員会

教育長　石　橋　正　信

例　言

1．本書は福岡市教育委員会がホテル建設に伴い、福岡市博多区祇園町326-1（地番）で発掘調査を実施した博多遺跡群第241次調査の報告である。

2．本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
２０１２	ＨＫＴ－241	１９７㎡	１９７㎡	2019年６月１日～９月４日

3．本書に掲載した遺構の写真撮影・実測は調査担当の佐藤一郎（埋蔵文化財課文化財主事）、製図は佐藤の他、資料整理補助職員の鳥井幸代が行った。

4．遺物の写真撮影は佐藤、実測は技能員の棚町陽子･平田春美、製図は佐藤･鳥井の他、資料整理補助職員の萩尾朱美が行った。

5．遺物の整理は鳥井･資料整理補助職員の甲斐田嘉子が行った。

6．金属製品の保存処理･X線写真撮影は埋蔵文化財センター上角智希･藤崎彩乃が行った。

7．遺構は2桁の通し番号を用い、種類に応じてSD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。

8．本書の中国陶磁器の分類は「陶磁器分類編」『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財第49集2000、陶器の名称については「博多出土貿易陶磁分類表」『博多ー高速鉄道関係調査(1)ー』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集1984による。

9．本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

10．本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 5
　1　調査に至る経緯 …… 5
　2　調査の組織 …… 5
Ⅱ 調査地の位置と環境 …… 5
Ⅲ 調査の記録
　1　調査の概要 …… 7
　2　遺構と遺物
　（1）遺構 …… 7
　（2）遺物 ……12
Ⅳ　小結 ……26

挿　図　目　次

第１図　博多遺跡群発掘区域図（縮尺1/8000）…… 6
第２図　博多遺跡群第241次調査発掘地（縮尺1/2000）…… 6
第３図　博多遺跡群第241次調査遺構配置図（縮尺1/100）…… 8
第４図　井戸実測図1（縮尺1/60）…… 9
第５図　井戸実測図2（縮尺1/60）……10
第６図　土坑実測図（縮尺 1/40）……11
第７図　井戸出土遺物実測図1（縮尺 1/3）……13
第８図　井戸出土遺物実測図2（縮尺 1/3）……14
第９図　井戸出土遺物実測図3（縮尺 1/3）……15
第10図　土坑出土遺物実測図1（縮尺 1/3）……17
第11図　土坑出土遺物実測図2（縮尺 1/3）……19
第12図　土坑出土遺物実測図3（縮尺 1/3）……20
第13図　柱穴・ピット状遺構他出土遺物実測図（縮尺1/3）……21
第14図　瓦磚・石製品・鉄製品実測図（縮尺 1/4）……22

表　目　次

第１表　銅銭一覧表 ……23
第２表　土師器計測表 ……24

図　版　目　次

図版１　1.博多遺跡群第241次Ⅰ区（東から）
2.博多遺跡群第241次Ⅱ区（南東から）
3.発掘作業風景
図版２　1.SE03井戸
2.SE04井戸（南東から）
3.SE05/07井戸（南東から）
4.SE09井戸（南西から）
5.SE31井戸（南西から）
6.SE35井戸（北から）
図版３　1.SE37井戸（南東から）
2.SE37井戸土層
3.SD34土層（南西から）
4.SK02土坑（西から）
5.SK12土層
6.SK13土層（南東から）
図版４　1.SK14土坑（東から）
2.SK16土層
3.SK17土坑（南西から）
4.SK26土層
5.SB10竪穴住居跡（南から）
6.SB10遺物出土状況
図版５　1.Pit15土層（東から）
2.SE09北Pit
3.SX41土坑（南西から）
4.SX41遺物出土状況
図版６　出土銅銭X線写真
図版７　出土遺物

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経緯

2019（令和元）年8月23日、小田急電鉄株式会社から本市に対して博多区祇園町326-1（地番）におけるホテル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（2019-2-566）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の中央に位置する。埋蔵文化財課がこれを受け、同年10月30日に確認調査を行い、現地表より1.95m以下の深さで遺構を確認した。申請者と文化財保護に関する協議をもったが、申請面積352.40㎡の内工事による影響が及ぶ197.27㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は翌2019（平成30）年6月1日から9月4日まで行ない、令和4年度に整理・報告することとした。

2　調査の組織

発掘調査委託　小田急電鉄株式会社　　発掘調査受託　福岡市

発掘調査（令和2年度）　　資料整理（令和4年度）

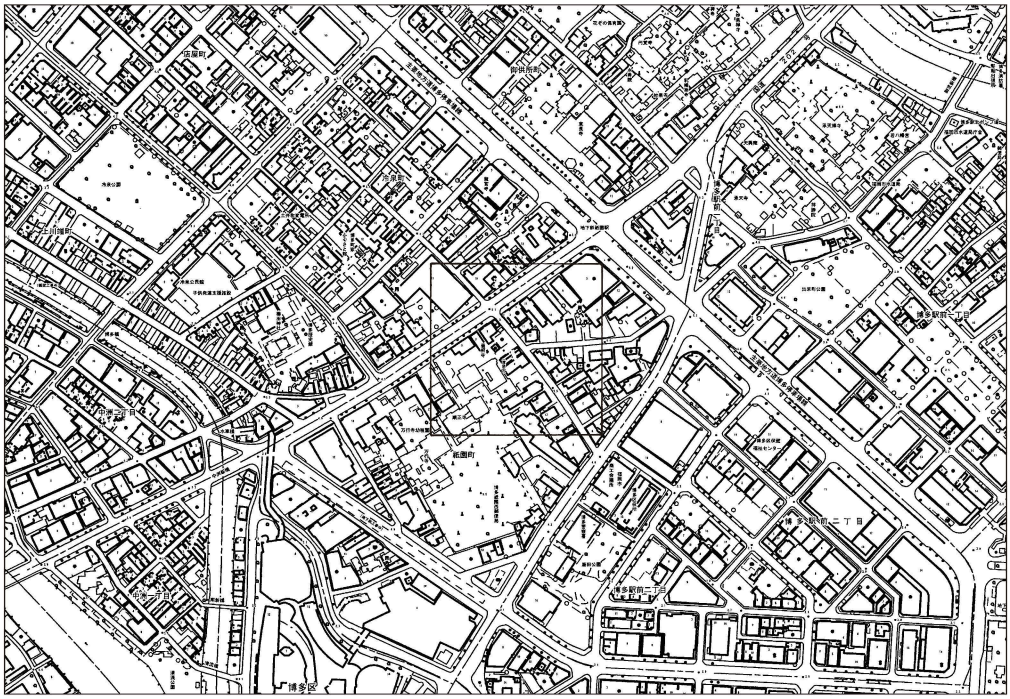
福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課		福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	
課長	菅波 正人		菅波 正人
調査第1係長	吉武 学	調査第1係長	本田浩二郎
事前審査担当	田上 勇一郎（主任文化財主事）		森本 幹彦（主任文化財主事）
	山本 晃平（文化財主事）		三浦 悠葵（文化財主事）
発掘調査	佐藤 一郎（主任文化財主事）	資料整理	佐藤 一郎（文化財主事/再任用）
試掘調査	朝岡 俊也（文化財主事 令和元年度）		
庶務	文化財活用課管理調整係		
	松原 加奈枝		内藤 愛

また、設計のＵＤＳ株式会社、施工の株式会社佐伯建設、地権者の宗教法人善照寺を始めとする地元祇園町町内の方々のご協力により、博多遺跡群第241次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

Ⅱ　調査地の位置と環境

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口部右岸に位置し、博多湾岸沿いに形成された古砂丘上に立地する。北が博多湾、西は那珂川、東は石堂川（御笠川下流での通称、近世に付け替えられた）に面する。御笠川は現在の博多駅北辺りから南西に折れ、住吉神社の南側で河口に至り、神社を挟んで北側では那珂川河口で博多湾に流れ込んでいた。石堂川付替え以前、御笠川河口部付近は比恵川と呼ばれていた。南は比恵川の旧河道および氾濫原を境界とする。狭義の博多部の領域にほぼ重なる。

調査地は遺跡の南東に位置し、地山の標高は4.0m前後を測る。周辺では調査地から半径100mの範囲に限っても共同住宅建設等の再開発に伴い第7･27･50･51･133･147･156･166･169･170･175･180･222･235･236次調査が行われ、古墳時代前期から中世前期にかけての遺構が数多く検出されている。



第１図　博多遺跡群発掘区域図（縮尺 1/8000）

第２図　博多遺跡群第 241 次調査発掘地（縮尺 1/2000）

Ⅲ　調査の記録

1　調査の概要

11m×22m の長方形の調査区は建設工事に先行してシートパイルによる土留、径 1.4m の杭打設がなされた。事前の協議で、現地表下 2m の遺構確認面まで鋤取り、残土は外部に搬出、調査の途中に 1 回、人力掘削による残土の外部搬出を行うこととした。6 月 1 日に発掘機材、2 日に借上備品を搬入し、3 日から既存の建物の基礎等の撹乱浚い作業を開始した。4 日からは A 区遺構面清掃・遺構確認を行い、続いて遺構検出を開始した。7 月 8 日に全景写真撮影、その後個々の遺構の完掘・写真撮影・実測を行い、7 月 27 日の残土搬出後、残土置き場部分（B 区）の遺構検出に当たった。8 月 12 日に残土置場部分の写真撮影を行い、追って遺構の完掘・記録作成を行った。8 月 28 日に遺構の完掘・記録作成が終了した。9 月 1 日に借上備品の返却、2・3 日に出土遺物や機材を洗い、4 日の撤収作業で調査が終了した。

2　遺構と遺物

検出遺構

井戸（第 4・5 図）

SE03　調査区の北東で検出した。掘り方の平面形は径 3.9 ～ 4.5m の不整円形を呈し、深さ 2.6m を測る。基底部中央に径 0.8m、深さ 0.7m の桶側の痕跡が残る。底面の標高 1.1m を測る。SK14 を切る。

SE04　調査区南壁面中央ややの東側で検出した。遺構の南側は壁面、西側は先行して打設された杭にかかり、未検出である。検出した掘り方の径 1.2m を測り、深さ 2.3m を測る。基底部西側で深さ 0.55m の桶側の痕跡の一部を確認した。底面の標高は不明である。

SE05　調査区の西側で検出した。掘り方の平面形は径 2.5 ～ 3.1m の不整円形を呈し、深さ 2.6m を測る。基底部中央に径 0.85m、深さ 1.5m の桶側の痕跡が残る。底面の標高は 1.3m を測る。

SE07　調査区中央西で検出した。掘り方の平面形は径 2.8 ～ 3.0m の不整円形を呈し、深さ 2.5m を測る。基底部中央に径 0.55m、深さ 1.1m の桶側の痕跡が残る。底面の標高は 1.3m を測る。遺構の南東が SK02 に切られる。

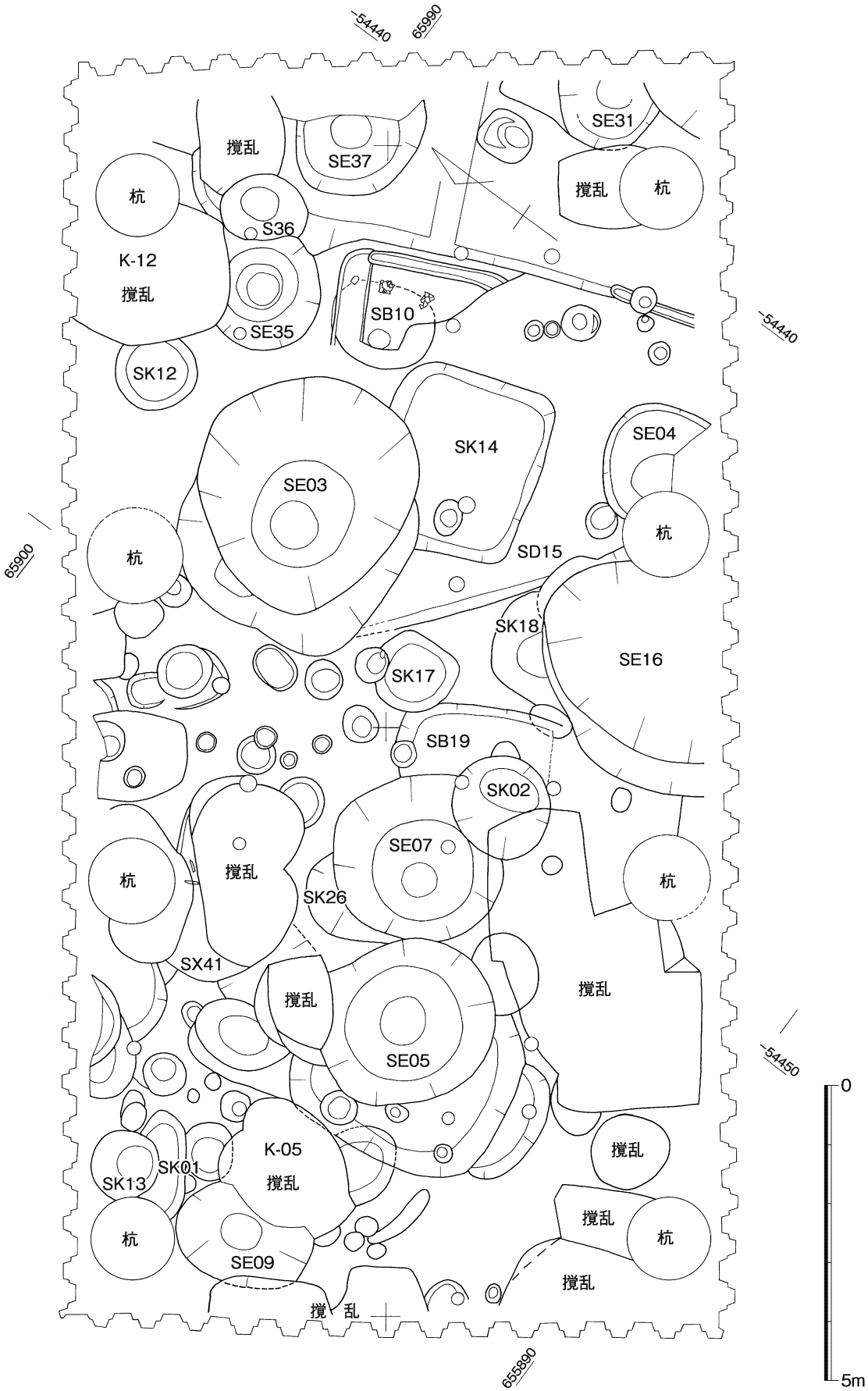
SE09　調査区北西で検出した。掘り方の平面形は径 2.4m 前後の不整円形を呈し、深さ 2.5m を測る。基底部中央に径 0.7m、深さ 0.5m の桶側の痕跡が残る。底面の標高は 1.3m を測る。遺構の南東が撹乱 K-05 に切られる。

SE16　調査区南壁面中央で検出した。遺構の南側は壁面にかかり、未検出である。検出した掘り方の最大径 3.8m を測り、深さ 2.2m を測る。基底部中央に径 1.3m、深さ 0.7m の桶側の痕跡がみられた。

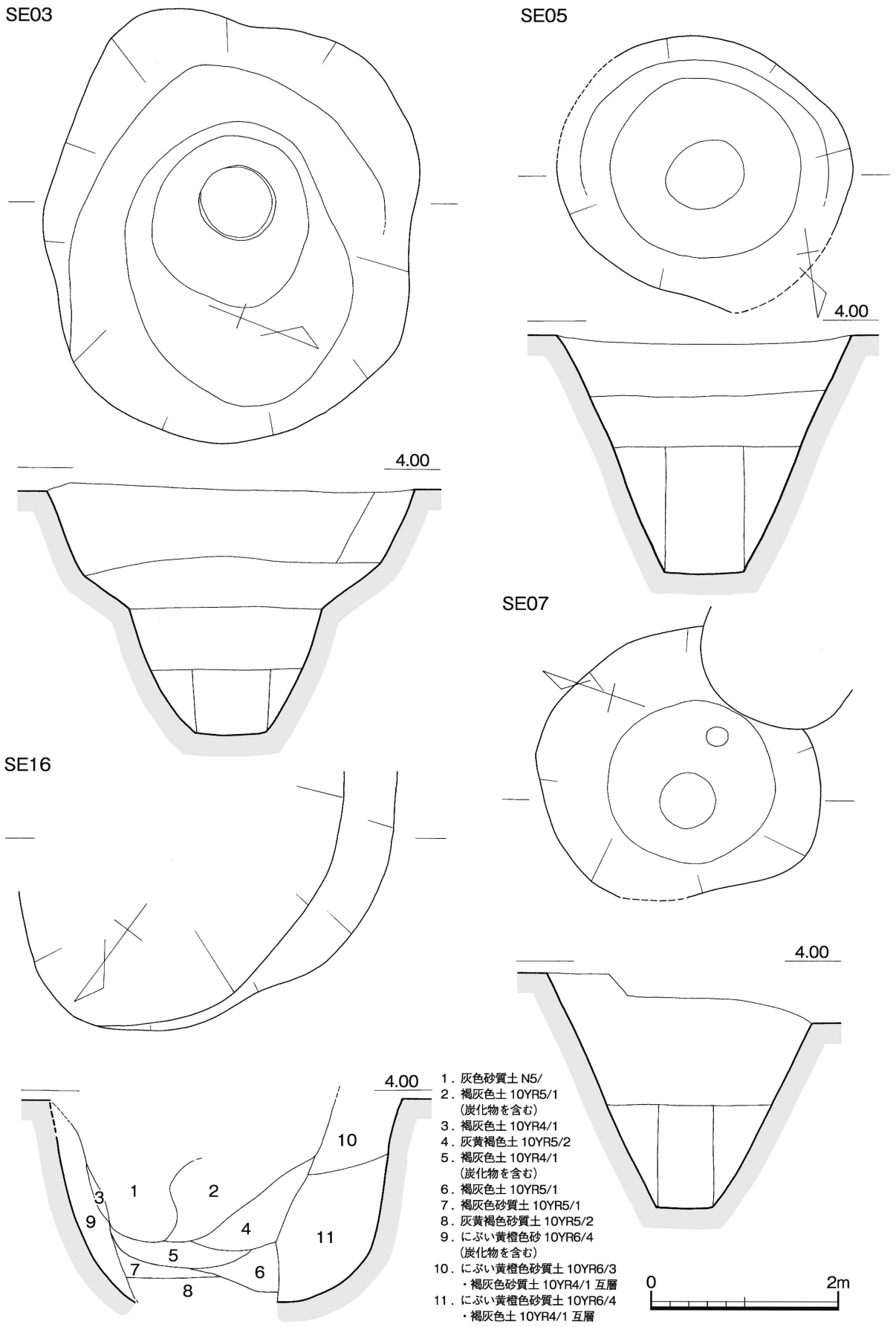
SE31　調査区東壁面の南側で検出した。遺構の東側は壁面にかかり、未検出である。検出した掘り方の最大径 1.7m を測り、深さ 2.4m を測る。基底部中央に径 0.5m、深さ 2.4m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 1.5m を測る。

SE35　調査区北東で検出した。掘り方の平面形は径 1.9 ～ 2.1m の不整円形を呈し、深さ 2.5m を測る。基底部中央に径 0.55m、深さ 0.35m の桶側の痕跡が残る。底面の標高は 1.3m を測る。遺構の北西が撹乱 K-12 に切られる。

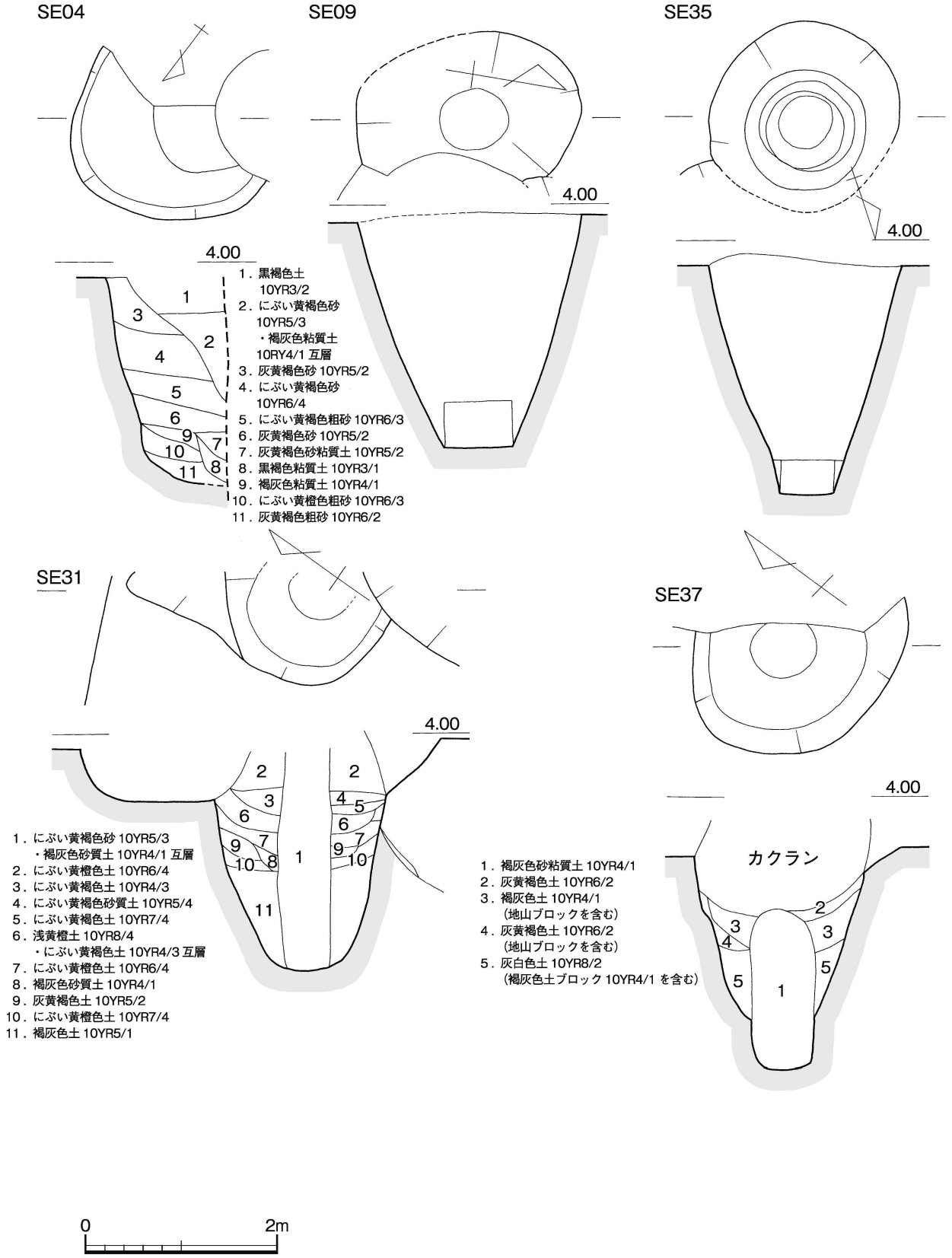
SE37　調査区東壁面中央で検出した。遺構の東側は壁面にかかり、未検出である。検出した掘



第３図　博多遺跡群第 241 次調査遺構配置図（縮尺 1/100）



第４図　井戸実測図１（縮尺 1/60）



第５図　井戸実測図２（縮尺 1/60）

り方の最大径 2.4m を測り、深さ 2.6m を測る。基底部中央に径 0.6m、深さ 1.7m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 1.6m を測る。

土坑（第 6 図）

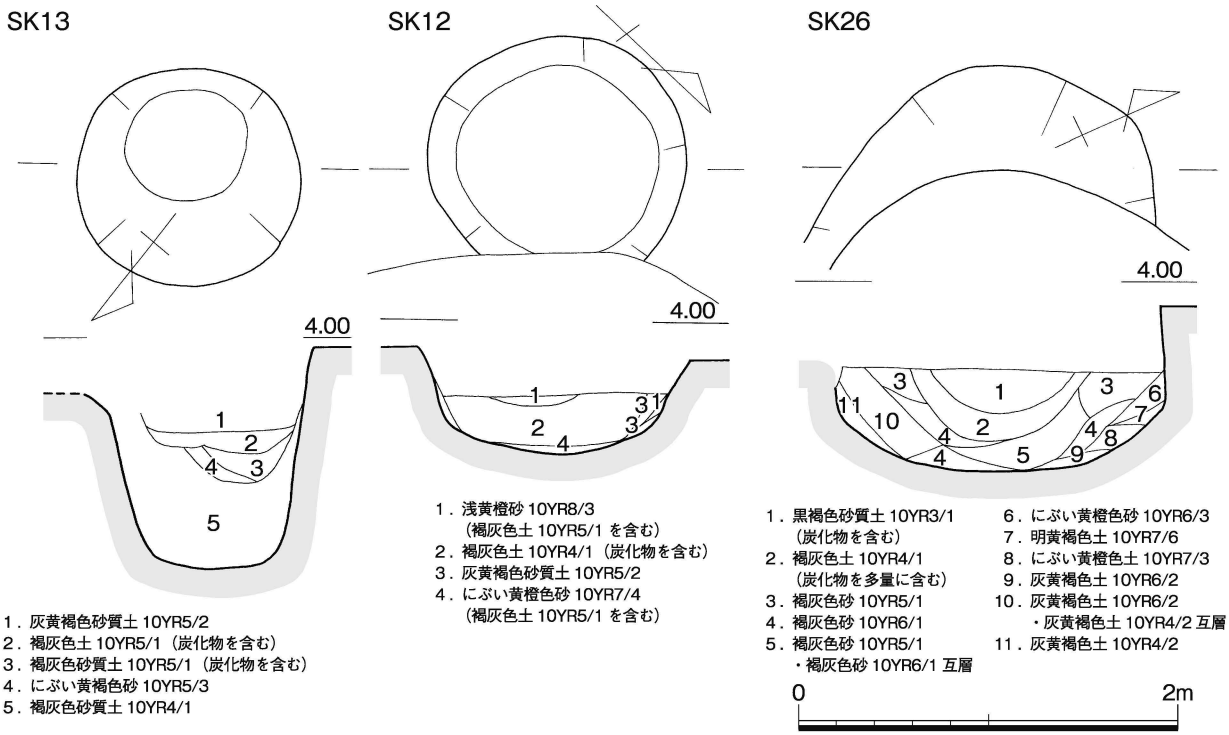
SK12　調査区北 I 層下面で検出した。1.7m×2.0m の不整楕円形を呈し、深さ 0.8m を測る。遺構の北東に K-12 がかかる。

SK13　調査区西 I 層下面で検出した。遺構の南東が SK01 に切られる。幅 1.4m、残存長 1.8m の不整方形を呈し、深さ 0.7m を測る。

SK26　調査区南 I 層上面で検出した。遺構の南東が SE07 に切られる。径 1.5m 前後の不整円形を呈し、深さ 1.6m を測る。

SB10　調査区北 I 層下面で検出した残存長 2.9m×1.8m、深さ 0.15m の竪穴建物の断片か。土師器甕 2 点が床面から 10cm 浮いた状態で出土している。南側は撹乱を受けている。

SB19　調査区中央 I 層下面で検出した残存長 2.7m×1.2m、深さ 0.25m の竪穴建物の断片か。SK02･SK17 に切られる。



第 6 図　土坑実測図（縮尺 1/40）

出土遺物

SE03 出土遺物（第 7 図） 11･17･24 の他は井戸枠内からの出土である。16 は混入品か。

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、

小皿（1 ～ 4）口径 8.6 ～ 9.6cm･器高 1.0 ～ 1.4cm･底径 6.1 ～ 7.5cm を測る。

杯（5 ～ 7）口径 15.4 ～ 16.0cm･器高 2.5 ～ 3.0cm･底径 10.3 ～ 10.8cm を測る。

白磁 碗（8 ～ 12）8･9 は碗Ⅳ類、8 は内面の体部と底部の境に沈圏線が付くⅣ-1a で、9 は口縁部片である。10 は口縁端部が嘴状を呈し、内面に櫛状工具で施文するⅤ-4b で、外底に墨書「徳廣」を記す。11 は丸みを持った体部からわずかに外反する口縁部が延び、内外面とも無文のⅤ-2a で底部は欠失している。12 は内底見込みの釉を輪状に掻き取るⅧ-3 である。

浅碗（13）内面に櫛状工具で施文するⅥ-1b 底部片で、外底に墨書を記す。

皿（14）口縁部が外反し、高台の削り出しが浅いⅡ-1a である。

青磁 碗（15）口縁部～体部上位の破片で、体部外面に花弁の外形をヘラ描きし、その間に櫛目を入れ、花弁の脈を表現する。内面は櫛状工具で施文する。

皿（16）内底にヘラによる簡略化した花文と櫛状施文具による「之」字形点綴文を入れる同安窯系。

青白磁 小壺蓋（17）身受けの返りを持ち、天井部外面に型作りで花弁を施す。

須恵器 甕（18）体部中位以下は欠失する。頸部が短く、口縁部は緩く外に開き、口縁端部を上に短くつまみ出す。口縁部は内外面とも回転横ナデ、体部外面に叩きが残り、内面は回転横ナデを施す。

陶器 こね鉢（19･20）口縁端部を内下方に拡張し、口縁下内面に断面Ⅴ字の隆帯をめぐらす。19 は口縁端部内面から体部中位にかけて灰黄褐色の釉が掛かる。胎土には白色砂粒を多量に含み、にぶい赤褐色を呈する。20 は無釉の焼締め陶で、胎土には白色砂粒を多量に含み、にぶい赤褐色を呈する。

土錘（21･22）径 1.1cm の管状土錘で、いずれも一端が欠失する。

石礫（23）径 2.2cm の球形に加工する。石材は凝灰岩である。

土師器 丸底壺（24）扁球形の体部からラッパ状の口縁部が大きく開く。口縁端部は欠失する。

SE04 出土遺物（第 8 図）

滑石製品（1）石鍋片を長辺 9cm･短辺 4.5cm の短冊状に再加工したもので、径 2.3 ～ 2.7cm の截頭円錐形の孔を二個連ねて穿つ。

SE05 出土遺物（第 8 図）7 のみ井戸枠内出土である。

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。

小皿（2･3）口径 8.5･9.5cm･器高 1.4･1.2cm･底径 5.9 ～ 8.2cm を測る。

杯（4）口径 13.0cm･器高 2.4cm･底径 10.8cm を測る。

青磁 碗（5）外面に鎬蓮弁文を削り出す直口碗Ⅲ類の口縁部～体部片である。

杯（6）体部は丸みを持ち、鍔縁の口縁端部をつまみ上げるⅢ-3 の口縁部～体部片である。

皿（7）碁笥底の底部片で、平坦な内底見込みに花文をヘラ描きする。

白磁 皿（8）体部中位で内湾し、その内面に段が付くⅥ-1a である。

滑石製石鍋（9）口縁部外面に縦耳を削り出す石鍋のミニチュアである。

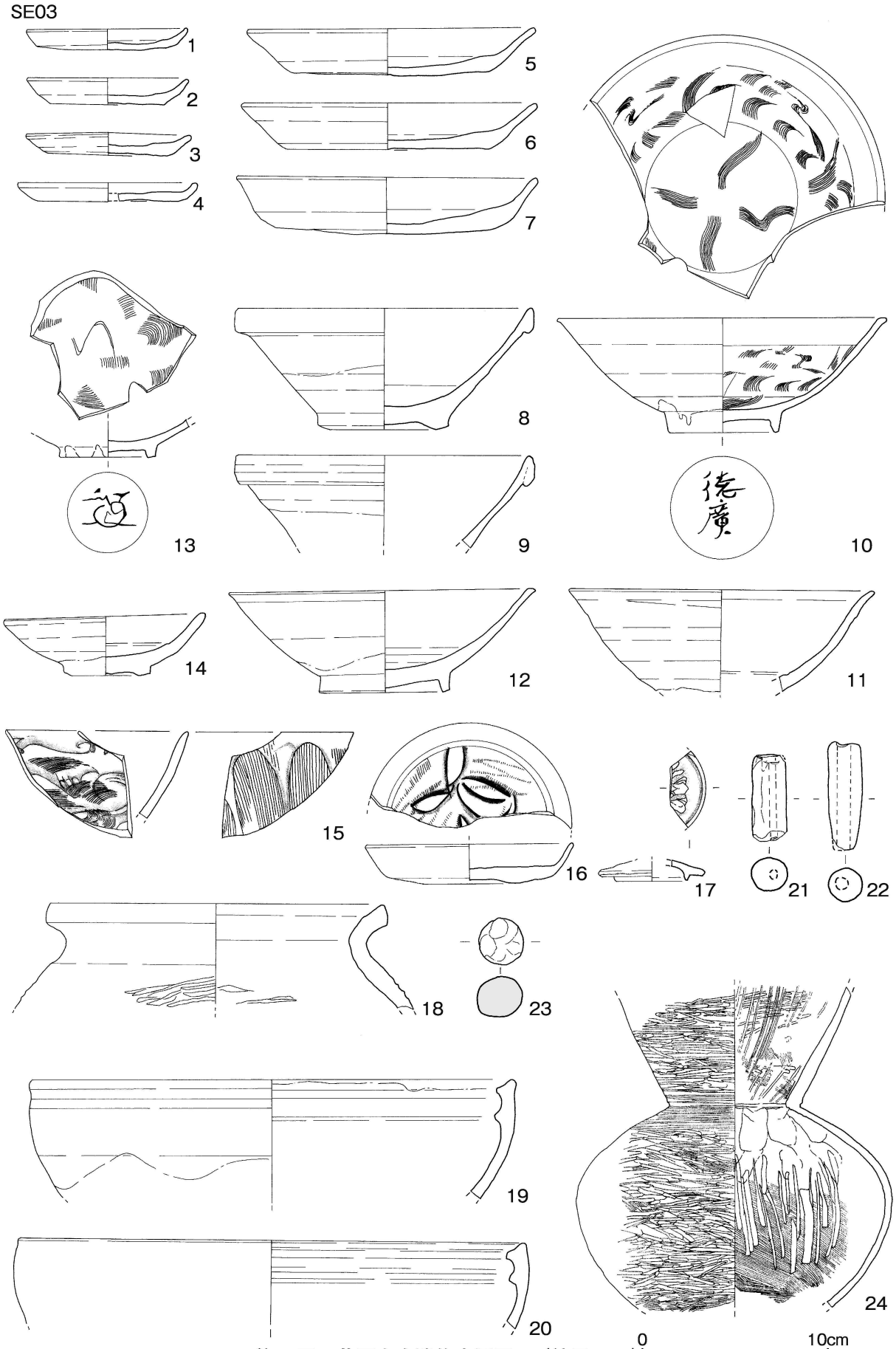
SE07 出土遺物（第 8 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。

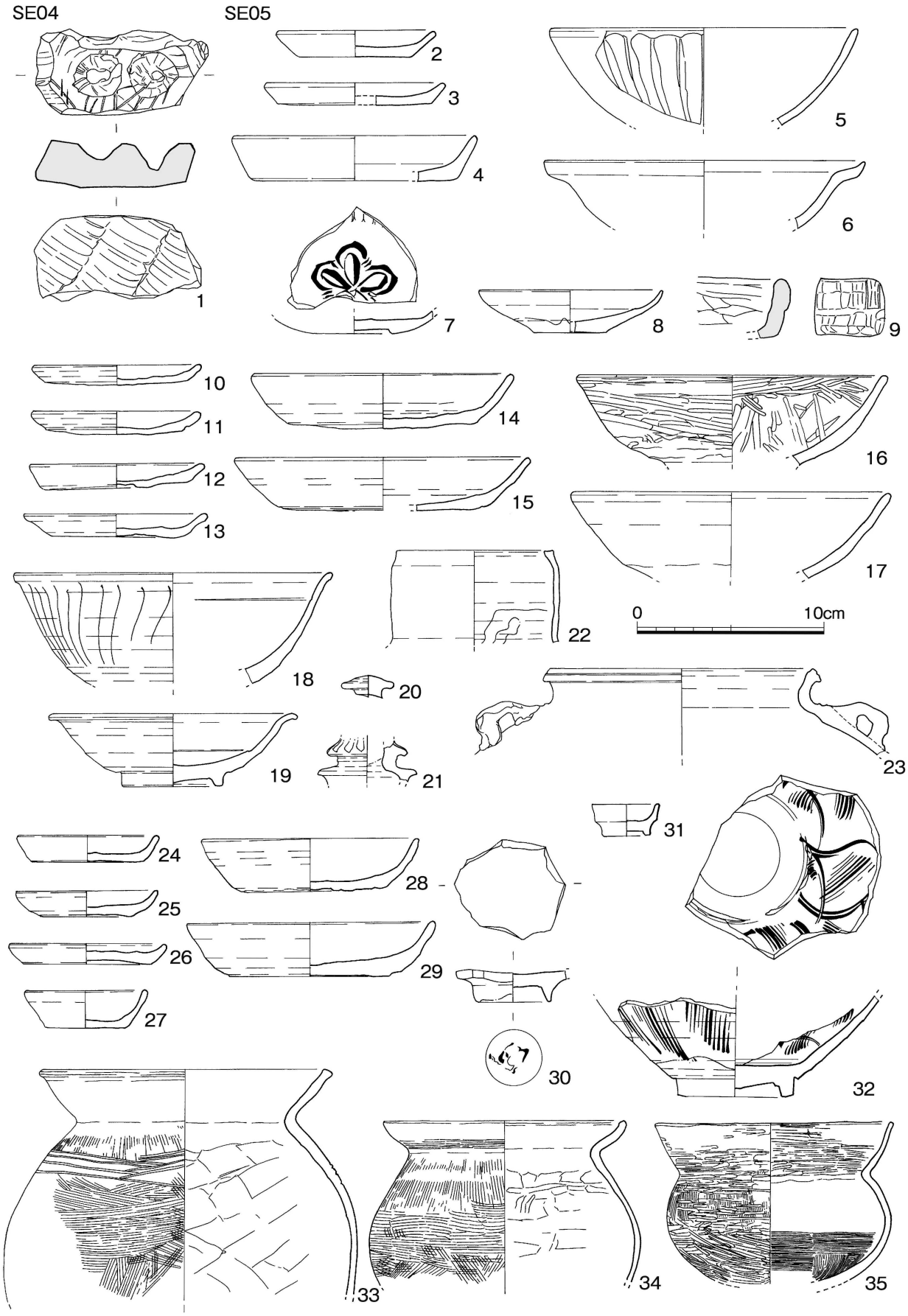
小皿（10 ～ 13）口径 9.0 ～ 9.8cm･器高 1.1 ～ 1.3cm･底径 7.4 ～ 7.8cm を測る。

杯（14･15）口径 14.0 ～ 15.8cm･器高 2.9･2.8cm･底径 10.2･11.0cm を測る。

瓦器 椀（16･17）体部中位の屈曲部は肥厚し、底部は欠失する。内外面とも密にヘラ磨きされる。



第７図　井戸出土遺物実測図１（縮尺 1/3）



第８図　井戸出土遺物実測図２（縮尺 1/3）

白磁 碗（18）体部外面に放射状にヘラによる文様を入れるⅤ-2b で、底部は欠失する。

皿（19）Ⅲ-2 の大型品で、口縁端部が下方に緩く折れ曲がる。

青白磁 小壺 蓋（20）無頸小壺の栓状蓋である。

灯火器（21）杯と脚部の接合部で、反り花状の削り出しがある鍔と無文の鍔が廻る。

陶器（22）筒状の頸部片で、胴部との境より上が残存する。

四耳壺（23）肩部より上の破片で、頸部は短く外傾し、口縁端部は三角につま出す。肩部には縦耳を貼付する。

SE09 出土遺物（第 8 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、25・30 の内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。他は内底まで横ナデ。

小皿（24 ～ 26）口径 7.6 ～ 8.4cm・器高 1.1 ～ 1.4cm・底径 5.8 ～ 6.8cm を測る。

特小皿（27）口径 6.6cm・器高 2.1cm・底径 4.3cm を測る。

杯（28・29）口径 11.7・13.3cm・器高 2.9cm・底径 8.2・8.6cm を測る。

青白磁 杯（30）外底に墨書（判読不明）を記す底部片で、高台の外側まで釉が掛けられる。

白磁 特小杯（31）口縁部が直立し、高台内の削り出しは浅い。

青磁 碗（32）口縁部が欠失する。体部外面にヘラで条線を入れる　体部内面にヘラ、櫛状施文具を用いて花文を施す。内底見込みの釉を輪状に掻き取る。

SE16 出土遺物（第 8 図）SB19 を切っており、それに伴う遺物が多く混入している。

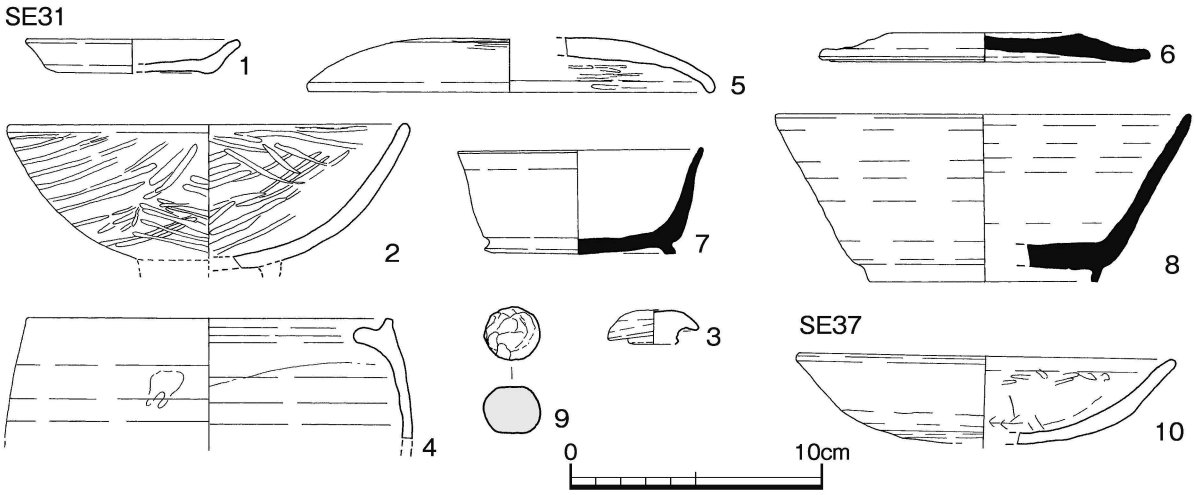
土師器 甕（33・34）33 は口縁部が直線的に外上方へ延び、口縁端部を外側に短くつまみ出す。肩部には凹線を 4 条めぐらす。体部内面は斜め方向のヘラ削りを施す。34 は口縁部が内湾して延び、上端部をつまみ出す。体部内面は横方向のヘラ削りを施す。いずれも口縁部は横ナデ、体部外面は口縁部直下が縦方向のハケ目、体部中位は横方向、下位は斜め方向のハケ目、底部は欠失。

丸底壺（35）扁球形の体部から口縁部が内湾気味に延びる。口縁部内面から体部外面にかけて丁寧にヘラ磨きされる。

SE31 出土遺物（第 9 図）

土師器 小皿（1）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.4cm・器高 1.3cm・底径 6.0cm を測る。

瓦器 椀（2）外底部を除き内外面とも密にヘラ磨きされる。貼付された高台は剥落している。



第 9 図　井戸出土遺物実測図 3（縮尺 1/3）

青白磁 小壺 蓋（3）無頸小壺の栓状蓋である。

陶器 行平（4）口縁端部の内側に蓋受けが付く上半部の破片資料である。

土師器 杯 蓋（5）天井部外面は横ナデ、その他の部位は横方向にヘラ磨きを施す。

須恵器 杯 蓋（6）天井部外面はヘラ削りされ、横ナデの口縁部との境は明瞭な扁平な蓋である。

杯（7･8）7 は丸みを持つ体部上位で外に屈曲し、口縁部が直線的に延びる。底部端に外開きの高台を貼付する。8 は体部から口縁部まで外上方へ直線的に延び、底部端に断面四角の高台を貼付する。

石礫（9）径 2.2cm の球形に加工する。石材は滑石である。

SE37 出土遺物（第 9 図）

土師器 丸底杯（54）内面は研磨、外面は体部横ナデ、底部ナデ、口径 15.0cm･器高 3.5cm を測る。

SK01 出土遺物（第 10 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿（1）口径 8.4cm･器高 1.4cm･底径 6.1cm を測る。

杯（2･3）口径 11.7･12.7cm･器高 2.4･2.5cm･底径 7.2･8.2cm を測る。

堝（4）口縁が L 字に折れ、上端部は内傾する。内面は口縁下が横ナデ、体部は縦方向のハケ目、外面は口縁下が未調整、体部は縦方向のハケ目を施す。

白磁 碗（5）玉縁状口縁で、高台を幅広に浅く削り出す。内面の体部と底部の境に沈線はないⅣ類。

皿（6 ～ 10）6 ～ 8 は体部上位で屈曲し、その内面に段が付くⅥ-1a、9 は見込の釉を輪状に掻き取るⅢ-1、10 は 9 を大型にしたものである。

滑石製品（11）中心に穿孔がある円盤状石製品である。残存 1/3 から復元した直径 2.6cm、厚さ 2.0cm、中心に穿たれた孔の復元径 6mm を測る。

SK02 出土遺物（第 10･11 図）土師器･陶磁器の他、瓦磚類が出土している（第 14 図）。

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る

小皿（12 ～ 21）口径 8.6 ～ 9.5cm･器高 1.0 ～ 1.5cm･底径 6.5 ～ 7.6cm を測る。

杯（22･23）口径 15.0･16.6cm･器高 2.7･3.1cm･底径 11.4･9.6cm を測る。

白磁 碗（24 ～ 27）24 は口縁部が直線的に延び、端部を嘴状にし、外面を直に、内面を斜めに細く高い高台を削り出す。内外面とも無文のⅤ-4a、25 は内底見込みの釉を輪状に掻き取り、体部から口縁部まで直線的に延びるⅧ-2、26･27 は口縁端部が嘴状を呈し、内面に櫛状工具で施文するⅤ-4b で、26 は口縁部、27 は底部を欠失する。

棒状土製品（28）一端が欠失する断面台形の棒状土製品である。

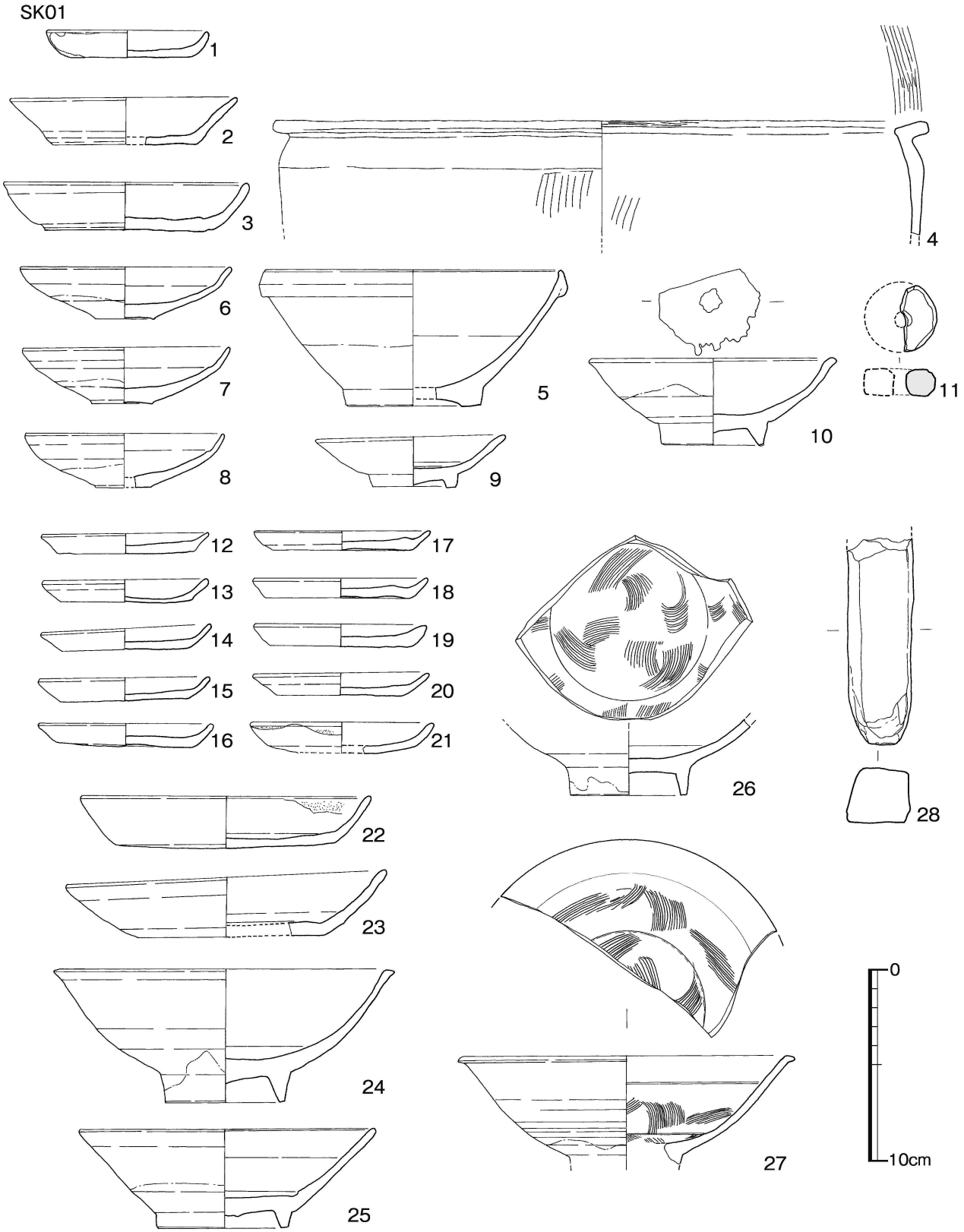
陶器 鉢（29）内湾する体部から口縁部が断面鋤先状に折れる。碁笥底状の輪状高台に削り出す。

水注（30）丸みを持った体部から頸部がやや外に開いて延びる。口縁端部を外につまみ出し、上端は外傾する。注口は肩部から直立気味に外上方に延びる。把手は頸部中位に基部が残る以外は欠失している。体部下半以下は欠失している。

四耳壷（31）樽形の壷で、頸部は内傾し直線的に延び、口縁端部を外につまみ出し、上端を水平にする。外面の頸部と胴部の境には凹線、その直下に波状凹線をめぐらせ、横向きの四耳を貼り付ける。碁笥底状の輪状高台を削り出す。

SB10 出土遺物（第 11 図）

土師器 甕（32 ～ 34）32･33 は倒卵形の体部から口縁部が直線的に外上方へ延びる。32 は口縁端部を内側に僅かにつまみ出す。口縁部内面は横ハケ目、外面は屈曲部まで横ナデ、体部外面は口縁部直下が縦方向のハケ目、肩部から体部中位にかけて斜め方向のハケ目の後横方向のハケ目、肩



第 10 図　土坑出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）

部には凹線を 2 条めぐらし、下半は斜め方向のハケ目を施す。体部内面は斜め方向のヘラ削りを施す。33 は口縁端部を内側に短くつまみ出す。器面調整については口縁部内面が横ナデ、肩部外面の凹線がない 他は 32 とほぼ同じである。34 は体部下半以下を欠失する。口縁端部を内側に短くつまみ出し、肩部に波状凹線をめぐらす。

SK12 出土遺物（第 12 図）

土師器　丸底杯（36）口径 15.0cm・器高 3.0cm を測る。

瓦器 椀（37）器高が低い浅碗で、体部中位の屈曲部は肥厚し、外開きの低い高台が貼付される。内面全体と体部外面は密にヘラ磨きされる。

白磁 碗（38）口縁部を玉縁状にし、高台を幅広に浅く削り出す。内面の体部と底部の境に沈線がめぐるⅣ-1a である。

皿（39）口縁部が直口、高台の削り出しは浅い。体部中位に段が付くⅡ-1 である。

須恵器 杯（40）体部から口縁部まで外上方へ直線的に延び、底部端に断面四角の高台を貼付する。

滑石製品（41）幅 1.5cm　全長 5.6cm　厚さ 1.1cm の直方体の滑石製品である。

石礫（42）直径 2.5cm・厚さ 2.0cm の円盤あるいは球形に加工する。石材は滑石である。

SK13 出土遺物（第 11 図）

土師器 鉢（35）椀状の体部から口縁部が内湾気味に延びる。口縁部内面はハケ目の後、横方向の細かいヘラ磨き、体部内面は横方向の細かいヘラ磨き、外面は口縁部から体部上半にかけて体部内面は横方向の細かいヘラ磨き、体部下半はヘラ削りの後、不定方向の細かいヘラ磨きを施す。

SK17 出土遺物（第 12 図）

土師器 甕（43）外反する口縁部の屈曲部内面には稜が付き、体部は球形を呈する。底部は欠失する。体部外面上半は縦方向、下半は縦あるいは斜め方向ハケ目、内面は斜め方向のヘラ削り、口縁部には横ナデを施す。

SB19 出土遺物（第 12 図）

土師器 甕（44）外反する口縁部の屈曲部内面には不明瞭な稜が付き、口縁部から体部上半の残存で、体部は張らない。胴部外面上半は縦方向、内面は斜め方向のヘラ削り、口縁部には横ナデを施す。

SK20 出土遺物（第 12 図）

須恵器 杯（45）口縁部が欠失し、底部端に断面四角の高台を貼付する。

SK26 出土遺物（第 12 図）

瓦器 椀(46・47)外底部を除き内外面とも粗くヘラ磨きされる。低い断面逆台形の高台を貼付する。

SK29 出土遺物（第 12 図）

土師器 甕（48・49）48 は中位が肥厚する口縁部が直線的に延び、端部は内上方につまみ出す。体部中位以下が欠失し、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面に叩きが残り、内面は斜め方向のヘラ削りを施す。49 は口縁部が僅かに内湾して延びる。口縁部は横ナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面は斜め方向のヘラ削りを施す。

SK30 出土遺物（第 12 図）

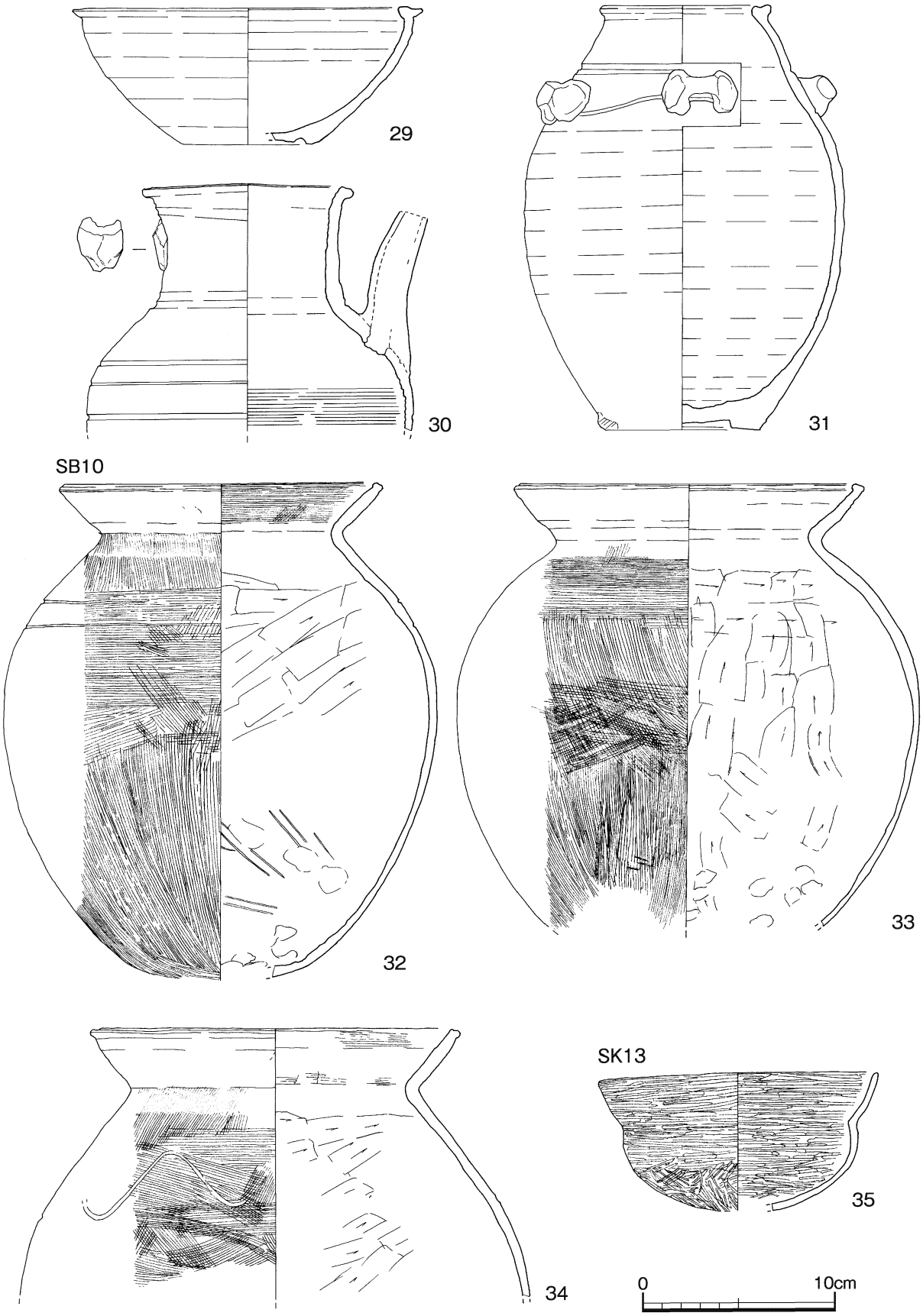
須恵器 杯蓋（50）天井部と口縁部の境に段や沈線はなく、丸くつくられている。口縁部は直立気味に外に開き、端部は丸くおさめられている。口径 12.3cm、器高 3.9cm を測る。天井部外面が回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。天井部外面にはヘラ記号が刻まれている。

SK32 出土遺物（第 12 図）

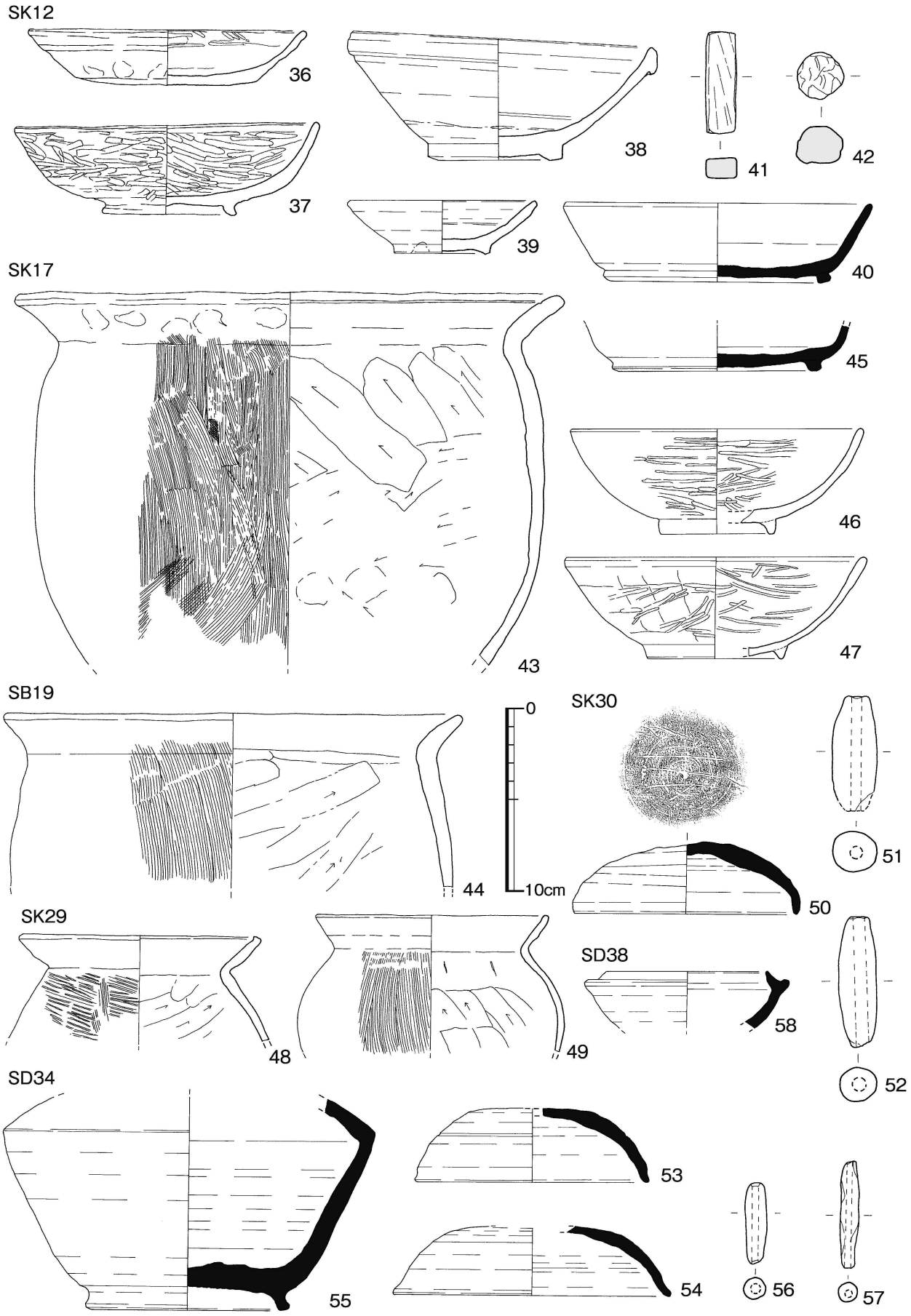
土錘（51・52）紡錘形の管状土錘で、全長 6.2・7.1cm・最大径 2.4・2.0cm を測る。

SD34 出土遺物（第 12 図）いずれも上面からの出土である。

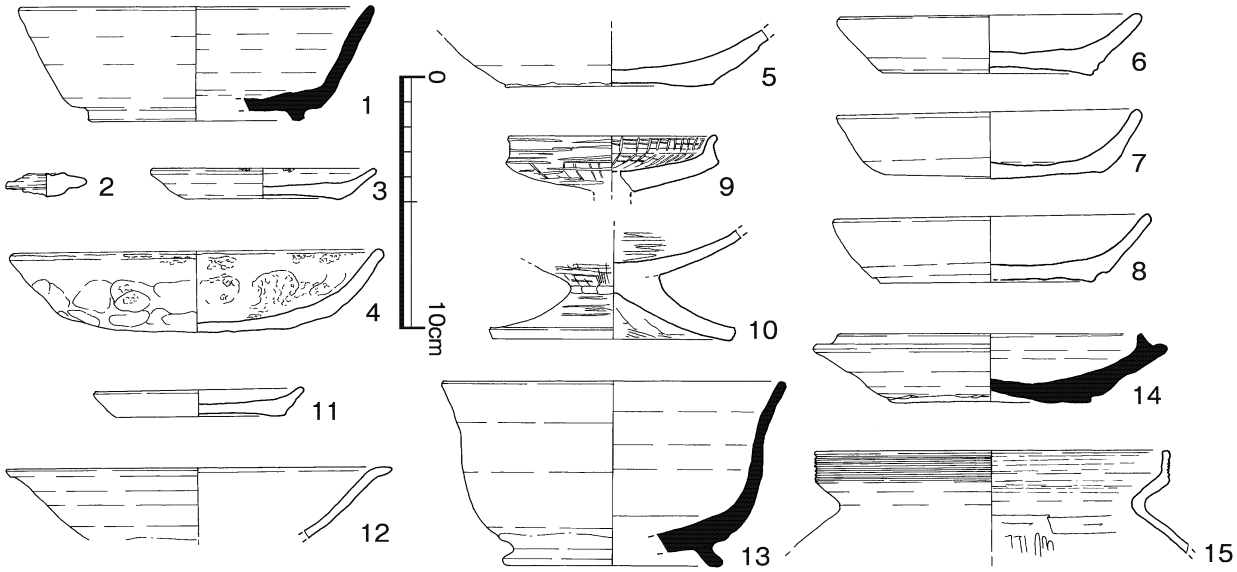
須恵器　杯蓋（53・54）天井部と口縁部の境に段や沈線はなく、丸くつくられている。口縁端部は丸くおさめられている。口径 12.6・15.0cm、器高 4.0・3.7cm を測る。天井部外面が回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。53 は赤焼きで、54 の口縁部は外反気味に外に開く。



第 11 図　土坑出土遺物実測図 2（縮尺 1/3）



第 12 図　土坑出土遺物実測図 3（縮尺 1/3）



第 13 図　柱穴･ピット状遺構他出土遺物実測図（縮尺 1/3）

長頸壺（55）肩部より上を欠失し、肩部と体部の境は鋭角に折れ稜をなす。体部外面は回転ヘラ削りを施す。外に開く高台が貼付される。

土錘（56･57）全長 5.5･5.8cm･最大径 1.2･1.1cm を測る管状土錘である。

SD38 出土遺物（第 12 図）

須恵器　杯身（58）受け部を持つ杯で、小さい受部から立ち上がり部が短く内傾している。底部が欠失する。口径 8.6cm、受け部径 11.0cm を測る。

柱穴･ピット状遺構他出土遺物（第 13 図）

須恵器 杯（1･13･14）1 は体部から口縁部まで外上方へ直線的に延び、底部端のやや内側にに断面四角の高台を貼付する。Pit03 出土。13 は体部上位で外に屈曲し、口縁部が直線的に延びる。体部と底部の境は丸みを持ち不明瞭で、底部端に外開きの高台を貼付する。A 区遺構面出土。14 は受け部を持つ杯身で、小さい受部から立ち上がり部が短く内傾する。K-14 撹乱出土。

青白磁 小壺 蓋（2）無頸小壺の栓状蓋で、Pit11 出土。

土師器 小皿（3･11）3 は底部糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 8.8cm･器高 1.2cm･底径 6.1cm を測る。Pit12 出土。11 は底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.3cm･器高 1.1cm･底径 6.6cm を測る。B 区遺構面出土。

丸底杯（4）内面は平滑に研磨され、外面は体部横ナデ、底部ナデ、体部と底部の境に指頭圧痕が残る。内面に煤が付着する。口径 14.7cm、器高 3.2cm を測る。Pit12 出土。

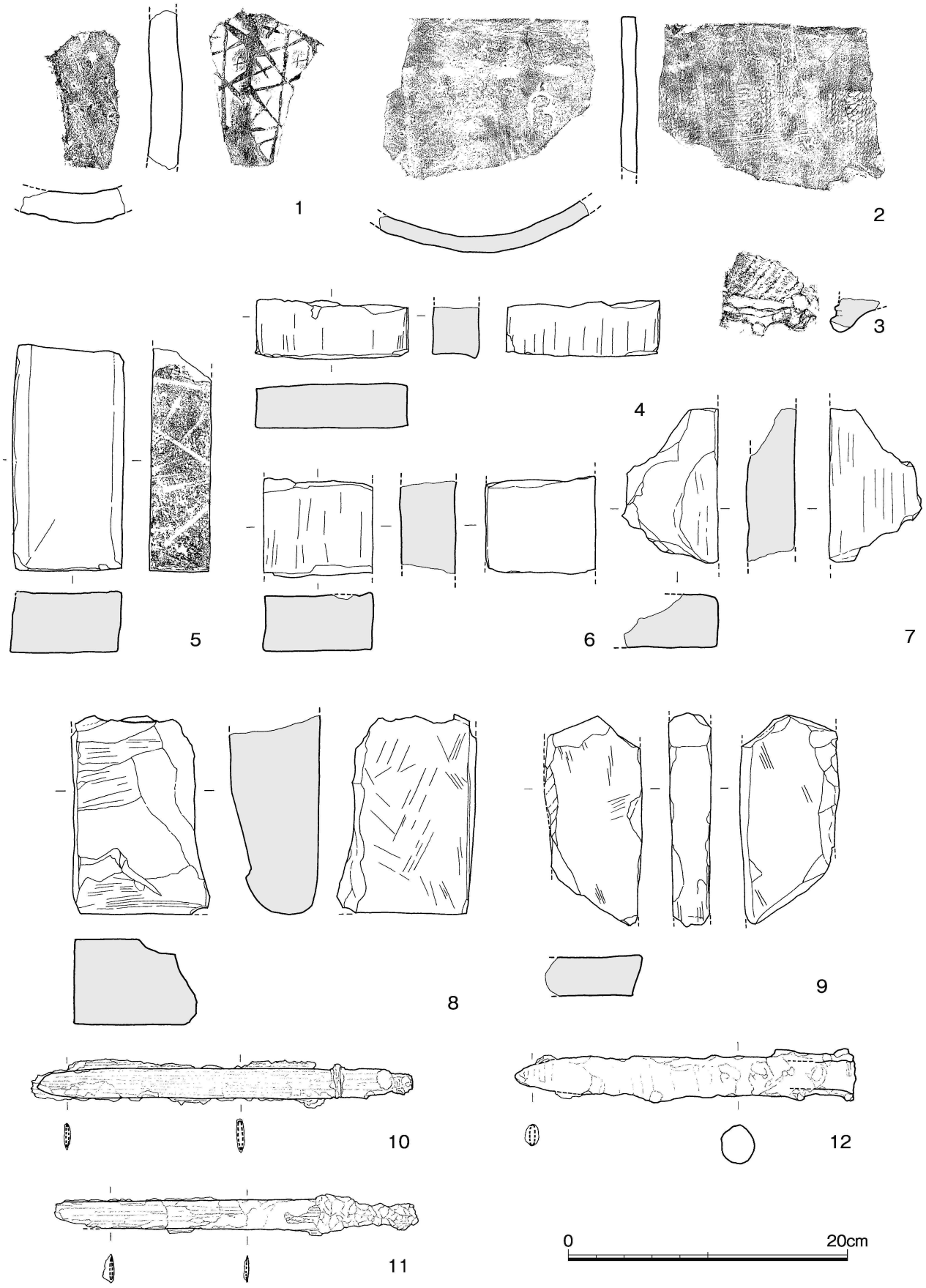
杯（5 ～ 8）5 は口縁部が欠失し、底部糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、底径 8.3cm を測る。Pit26 出土。6 ～ 8 は底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.0 ～ 12.5cm･器高 2.3 ～ 2.6cm･底径 7.2 ～ 8.6cm を測る。Pit52 出土。

土師器　小型器台（9）脚部は欠失し、皿状を呈する受部で、細かいヘラ磨きを施す。Pit54 出土。

高杯（10）短脚の高杯で、杯部上半は欠失している。外面および杯部内底は横ナデの後、ヘラ磨きを施す。Pit30 出土。

甕（15）直立する複合口縁の甕で、体部中位以下は欠失している。口縁部外面に凹線文を巡らせる。K-06 撹乱出土。

白磁 碗（12）浅型碗の口縁部片で、嘴状の端部を外に引き出す。A 区西側遺構面出土。



第 14 図　瓦磚･石製品･鉄製品実測図（縮尺 1/4）

瓦塼（第 13 図）1 が SK35、2･3 は SE03、4 ～ 7 は SK02 出土で、2 ～ 7 は中国産とみられる。

平瓦（1･2）1 は凹面に布目痕、凸面には斜格子の中に十字文を伴う叩きが残る。2 は粘土板桶巻作りによる薄手の平瓦で、堅緻に焼成されている。凹面は布目、側縁から 3 ～ 5cm のところに紐の痕跡が残る。凸面は縄目の叩きの後、粗く縦方向、側縁付近は横方向にナデ消している。側面は内面から 1/3 のまで刃物を入れ、分割の際の破面が残る。断面形はほぼ直角である。

軒平瓦（3）型引きによる三重弧文の顎部に押圧による波状文を配し、二重弧目を刺突し右流れの波状文とする押圧波状重弧文軒平瓦の瓦当部で、平瓦との接合部から剥離している。

磚（4 ～ 7）4 は残存する長辺の長さ 4.3cm･短辺の全長 11.0cm･厚さ 3.2cm を測る。5 ～ 7 は同一規格によるとみられ、5 は一端が欠失し、残存する長辺の長さ 16.3cm･短辺の全長 9.0cm･厚さ 4.5cm を測る。6 は両端が欠失し、残存する長辺の長さ 16.3cm･短辺の全長 7.0cm･厚さ 4.2cm を測る。7 は両端および一側面が欠失し、残存する長辺の長さ 11.2cm･残存する短辺の長さ 6.8cm ･厚さ 3.8cm を測る。

石製品（第 13 図）砥石（8･9）SE31 出土、石材は砂岩である。8 は残存長 14.5cm･幅 10.0cm･厚さ 6.2cm を測り、残存する 3 面の内 2 面を砥面とする。9 は残存長 15.1cm･幅 7.0cm･厚さ 3.0cm、3 面を砥面とする。

金属製品（第 13 図）いずれも鉄製､SX41（明確な掘り方は不明で､包含層の可能性もある）出土。10･11 は短刀で、柄と鞘の木質が残る。12 は鉾で、基部は袋状となる。

No.	登録番号	遺構	銭名	初鋳年	備考	No.	登録番号	遺構	銭名	初鋳年	備考
1	1	SK01	元□通寶		行書	5	8	K-01	皇宋通寶	1039	篆書
2	2		祥符元寶	1008		6	9	K-02	紹聖元寶	1094	篆書
3	6	Pit52	□平元寶			7	10	K-04	不明		
4	7	K-01	皇宋通寶	1039	真書	8					

第 1 表　銅銭一覧表

Ⅳ 小　結

遺構の時期　今回の調査で、一定数の土師器、陶磁器が出土した遺構の時期は、以下の通りである。

12 世紀前半　SK01 土師器 小皿φ8.5cm･杯φ12.0cm 前後 , 白磁 内底沈線なし碗Ⅳ類･皿Ⅵ-1a

12 世紀中葉　SE03 土師器 小皿φ9.0cm･杯φ15.7cm 前後 , 白磁碗Ⅳ-1a･Ⅴ-2a･Ⅴ-4b･Ⅷ-3、青磁碗 I-6a

SE07 土師器 小皿φ9.5cm･杯φ15.0cm 前後 , 白磁碗Ⅴ-2b

SK02 土師器 小皿φ9.0cm･杯φ160.cm 前後 , 白磁 碗Ⅴ-4a･Ⅴ-4b･Ⅷ-2

13 世紀後半　SE05 土師器 小皿φ9.0cm･杯φ13.0cm 前後 , 龍泉窯系青磁碗Ⅲ類 , 杯Ⅲ-3

14 世紀前半　SE09 土師器小皿φ8.0cm･特小皿φ6.6cm･杯φ12.5cm 前後 , 青白磁 杯

博多遺跡群では 11 世紀後半から 13 世紀前半にかけての遺構や遺物包含層から輸入陶磁器が多量に出土し、13 世紀後半から 15 世紀中葉になるとその出土量は減少し、博多に居留した宋商たちの消長と連動すると考えられている。241 次調査においても同様な傾向を窺える。13 世紀後半～ 14 世紀前半のまとまった量の高級品の部類に入る龍泉窯系青磁Ⅲ類の出土は、当時貿易に主体的にかかわっていたであろう寺院周辺に集中する。そこから離れた区域では同時期に広くみられる土師器や口禿白磁が出土しても、241 次調査 SE05 での出土例のように高級青磁の出土は極めて少なく、

完形に復元可能な破片でさえ希少である。

磚　SK02 から同一規格をとる中国産とみられる無文の磚が 3 点出土している。長辺の全長はいずれも一端が欠失し残存する最大長 16.3cm、それぞれの短辺の長さ・厚さが 9.0cm・4.5cm、7.0cm･4.2cm、6.8cm（残存長)･3.8cm を測る。それらと規格を異にする全長 11.0cm× 残存長 4.2cm･厚さ 3.2cm の磚も 1 点出土している。241 次調査地の北 180m に位置する 194 次調査では SX2181 池状遺構からは多量の中国系瓦磚類が出土している。出土した丸瓦･平瓦の重量は 128.5kg・455kg に及び、その多くは小片でほとんど接合せず、完形に近く復元できたものはない。調査担当者が述べる通り、これらは廃絶した建物から直接ではなく、整地等に用いられた後の流れ込みであろう。報告された実測図ではいずれも一端が欠失し（残存長 17cm）長辺の全長を知り得る資料はないが、短辺 9 ～ 10cm･厚さ 3cm 前後の幅広な磚が多数を占める。241 次の 1 点については一辺の全長･厚さから幅広な磚の破片とみられる。194 次 SX2181 からは他に短辺の長さ 6.5cm･厚さ 4.0cm と規格を異にする幅狭な磚が出土している。241 次調査 SK02 出土の磚 3 点は後者の幅狭な規格による。241 次調査地の南東 60m に位置する 173 次調査 SK43 からは短辺の長さ 6.8cm･厚さ 4.5cm（長辺は一端が欠失し残存長 15.3cm の幅狭な磚が出土している。北宋末に編さんされた建築書「営造法式」磚作の章に寸法規格、窯作の章磚の項には寸法規格に加え、製作について述べている。その内、條磚の最小規格は長辺の全長一尺二寸、短辺の全長六寸、厚さ二寸としている。博多遺跡群 56 次調査 SK0189 からは長辺の残存長 29.4cm、短辺の全長 18cm（六寸)、厚さ 3cm と営造法式の條磚の最小規格に近い磚が出土しているが、博多遺跡群で出土する磚のほとんどは営造法式最小規格の半分の寸法で、平面形が正方形の方磚の一辺を半分にした長辺と短辺の比が 2:1 の寸法となっている。幅広の磚については全長 18cm（六寸）前後に復元できよう。194･241 次で出土した幅狭で、厚さが 3 ～ 5 割増しの一群の長辺の長さは現在のところ不明である。成形については、粘土を范（型枠）に詰め、はみ出した粘土を切り出し、ヘラで仕上げる。側面は長辺･短辺部分とも未調整であるが、粘土塊の継ぎ目がみられる箇所もあれば、ヘラ調整の箇所もある。

博多 130―博多遺跡群第 173 次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1042 集 2009

博多 148―博多遺跡群第 194 次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1266 集 2015

竹島卓一「営造法式の研究 三」中央公論美術出版 1972

博多 34―博多遺跡群第 56 次発掘調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第 326 集 1993

挿図番号	№.	土遺	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
第7図	1	SE03	小皿	8.6	1.1	8.9
	2			8.6	1.4	6.0
	3			8.8	1.2	6.7
	4			9.6	1.0	7.6
	5		杯	15.2	2.6	10.3
	6			15.6	2.5	10.6
	7			16.0	2.9	10.8
第8図	2	SE05	小皿	8.5	1.4	5.9
	3			9.6	1.2	8.2
	4		杯	13.1	2.4	10.8
	10	SE07	小皿	9.0	1.1	7.6
	11			9.1	1.5	7.4
	12			9.4	1.4	7.6
	13			9.8	1.3	6.9
	14		杯	14.0	3.1	10.3
	15			15.8	2.8	11.0
	24	SE09	小皿	7.6	1.4	5.8
	25			7.6	1.4	4.8
	26			8.4	1.1	6.8
	27		特小	6.6	2.1	4.3
	28		皿	11.7	2.9	8.2
	29		杯	13.3	2.9	8.6
第9図	1	SE31		8.4	1.3	6.0
第10図	1	SK01	小皿	8.4	1.4	6.1
	2		小皿	11.7	2.4	7.2
	3		杯	12.7	2.5	8.2
	12	SK02	小皿	8.6	1.0	7.1
	13			8.6	1.2	6.8
	14			8.8	1.2	6.5
	15			8.8	1.3	6.6
	16			9.0	1.3	7.1
	17			9.0	1.0	7.2
	18			9.0	1.1	7.6
	19			9.0	1.1	7.6
	20			9.2	1.1	6.6
	21			9.5	1.5	6.7
	22		杯	15.0	2.7	11.4
	23			16.6	3.1	9.6

土師器小皿･杯以外、時期毎の法量に顕著な増減がない器種は除く。

第２表　土師器計測表

1. 博多遺跡群第 241 次Ⅰ区（東から）

2. 博多遺跡群第 241 次Ⅰ区（南東から）

3. 発掘作業風景

図版２

1. SE03 井戸

2. SE04 井戸（南東から）

3. SE05/07 井戸（南東から）

4. SE09 井戸（南西から）

5. SE31 井戸（南西から）

6. SE35 井戸（北から）

1. SE37 井戸（南東から）

2. SE37 井戸土層

3. SD34 土層（南西から）

4. SK02 土坑（西から）

5. SK12 土層

6. SK13 土層（南東から）

図版 4

1. SK14 土坑（東から）

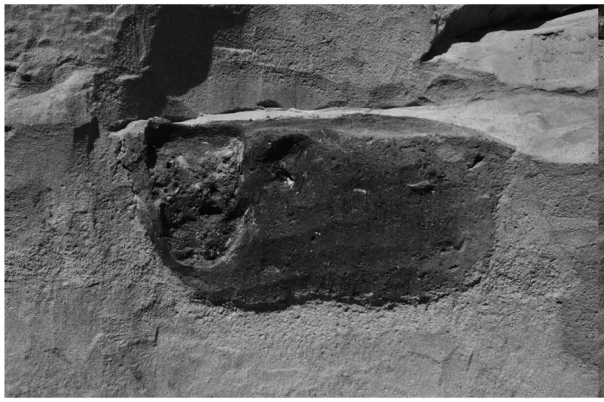
2. SK16 土層

3. SK17 土坑（南西から）

4. SK26 土層

5. SB10 竪穴住居跡（南から）

6. SB10 遺物出土状況



1. Pit15 土層（東から）

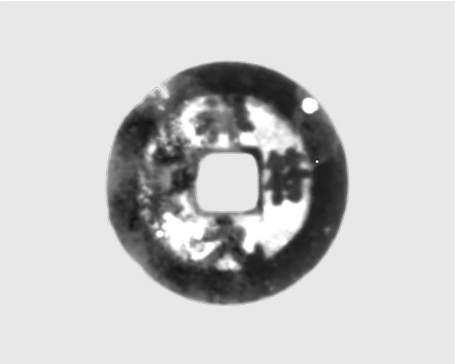
2. SE09 北 Pit

3. SX41 土坑（南西から）

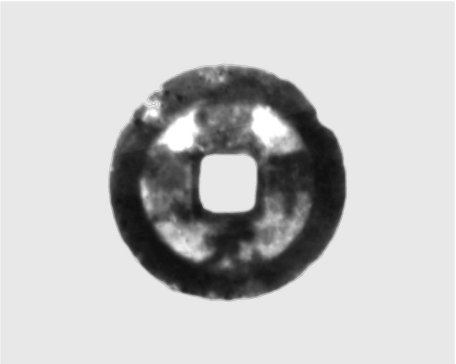
4. SX41 遺物出土状況

図版 6

1. 元□通寶

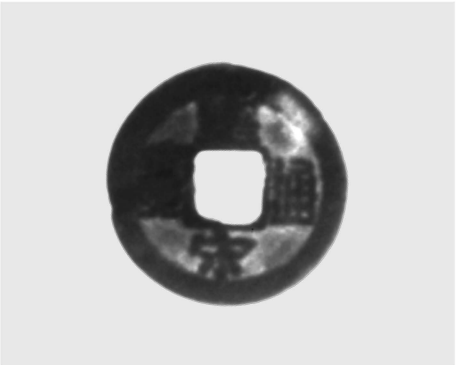


2. 祥符元寶



3. □平元寶

4. 皇宋通寶



5. 皇宋通寶

6. 紹聖通寶

1. SK02 出土陶器四耳壺

2. SK03 出土白磁碗

3. SB10 土師器甕悒

報告書抄録

ふりがな	はかた 194
書名	博多 194
副書名	博多遺跡群第241次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1482集
編著者名	佐藤一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	2023年（令和5年）3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
博多遺跡群 （第241次調査）	福岡市博多区 祇園町326-1（地番）	40132	121	33° 35′ 33″	130° 24′ 48″	20200601 ～ 20200904	197㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落	古墳・古代・中世	井戸・土坑	土師器・陶磁器・石製品・金属製品	

要約

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口部右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地している。調査地は博多遺跡群中央の南寄りに位置する。近世以降の堆積直下、標高4m前後の砂丘砂上面で、12世紀前半～13c後半の井戸を9基、土坑を8基、ピット状遺構40を検出した。調査区北東部では8世紀以前の遺物包含層が残り、掘り下げていく過程で、4世紀代の竪穴住居跡・土坑、8世紀代の土坑・ピット状遺構数個を検出したが、4世紀代の住居跡や土坑は後世の遺構や攪乱に切られ断片的に残るのみであった。遺物は国産の土師器、中国陶磁器片を主とし、コンテナ40数箱分が出土した。検出された遺構は中世前半、12世紀後半を主とし、12世紀前半・13世紀後半がそれに次ぐ。古墳時代から古代にかけての遺構も検出したが、後世の遺構に切られて残りはよくない。

博　多　194

― 箱崎遺跡第241次調査報告 ―

2023年（令和5年）3月23日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目16番24号